

# 『仮面の告白』論

——「私」による作家「三島由紀夫」像の完成——

中 尾 莉 奈

## はじめに

『仮面の告白』は、三島由紀夫が昭和二十四年四月二十七日に書きあげ、昭和二十四年七月五日に河出書房から刊行された書き下ろしの長編小説である。『仮面の告白』は、三島本人が、ちょうど長編を書きたいところであったと語ると共に、〈作家的生命を賭ける〉と明言した作品であると言われている。また、三島が坂本一亀氏に宛てた書簡において、「さて書き下ろしは十一月廿五日を起筆と予定し、題は『仮面の告白』といふのです<sup>(注1)</sup>」と書いている。同手紙で、今度の長編は「生まれて初めての私小説」とし、「今まで仮想の人物に対して鋭い心理分析の刃を自分に向けて、自分で自分の生体解剖をしようといふ試み<sup>(注2)</sup>で」と語っている。本作の主人公「私」の生い立ちは、作者三島由紀夫もと

い平岡公威の半生と類似する点が多い。作者と「私」の類似性は、意図的になされたと考えるのが妥当だろう。では、なぜ敢えて私小説とも取れる方法を『仮面の告白』で用いたのか。そこには、作者による理想の「三島由紀夫」像の完成を目的とした、自身の過去を作り替える作業がなされたからではないだろうか。

本論は、『仮面の告白』の「私」を考察することで、『仮面の告白』の「私」が描かれた理由を説明する。

## 一．『仮面の告白』で求めたもの

『仮面の告白』の「私」と公威（三島）とは類似した点が多いことがわかっている。しかし、決定的な相違点もある。それが、作家としての側面が描かれていない点だ。そこから、『仮面の告白』は私小説では無く、限りなく事実に近い虚構を綴った小説であると定義づけることができる。

私小説であるという手紙の言葉もあるのだから、私小説では無いと言うのは乱暴だという意見もあるだろう。しかし、あくまで「自分自身の生体解剖をしようといふ試みで」という言い方から、決して事実をありのまま書いたものとは言えないだろう。その観点から、公威と「私」を全くの別人とも、本人であるとも言いつけるのは難しい。しかし、この『仮面の告白』においては、意識的な引き寄せがあったことは明らかである。

ここで、柴田勝二氏の「語り出そうとする時点における自己認識との齟齬をきたすことが明確に意識されたからである。」<sup>(註)</sup>という意見を参考にする。この意見のように、齟齬が起ることを明確に意識した告白者は、「その齟齬の感覚から脱するべく、告白者は自己の軌跡を言語化し始めることになる。」<sup>(註)</sup>と考えられる。この言語化を進める過程で、齟齬を埋める為に限りなく自身と近い他者を生み出した。その結果、意識的引き寄せになったのではないだろうか。以上のことから、事実をもとにしたフィクション小説や、ある種の空想世界を言語化した結果と言うのが一番適切だろう。試行錯誤の末、自身の半生を振り返って再構築したものに、更に事実とは異なる部分を足した。そうして、『仮面の告白』を小説として完成させたのだ。

次に、作中の重要な要素である同性愛者としての「私」について考える。三島自身が同性愛者であったという話しは有名なものである。一方の「私」は、同性の、それも「悲劇的な」境遇にあるものを好み、それを性の対象としていることを表に出すことは無かった。あくまで、心の内に留めて一人「悪習」に耽るだけだったのである。「初恋」と呼べるような経験を同学年の近江にするが、それも表立って行動を起こして成就させようとはしなかった。それは、「私」の近江への態度を見れば明らかである。次に、その場面を引用する。

しかし、近江への片思ひ、人生で最初に出会つたこの恋においては、私はほんたうに、無邪気な肉慾を翼の下に隠し持つた小鳥と謂つた風だつた。私を迷はせたのは、獲得の欲望ではなく、ただ純粹な「誘惑」そのものだつたのだ。

少くとも学校にゐるあひだ、それもととりわけ退屈な授業中には、私は彼の横顔から目を離すことができずにゐた。愛とは求めることでありまた求められることだと知らない私に、それ以上の何が出来たであらう。愛とは私にとつて小さな謎の問答を謎のままに問ひ交

はすことにすぎなかつた。私のこのやうな傾慕の心は、それが何らかの形で報いられることを想像することさへしなかつたのだ。(第二章)

このように、近江への好意は見るだけに留まつていた。反対に、額田の姉に対しては「恋」をしているやうな行動を敢えて傍目にもわかるように取つた。次に引用するのがその場面である。

それでゐて、私は自分が額田の姉に恋してゐるのだと信じこんだ。私はいかにも私と同年輩の初心な高等学生がするやうに、彼女の家のまわりをうろついたり、彼女の家のちかくの本屋で永いことねばつてゐてその前をとほりかかる彼女をつかまへる機会を待つたり、クッションを抱きしめて女の抱心地を空想してみたり、彼女の唇の絵をいくつも描いてみたり、身も世もあらぬ様子で自問自答してみたりした。(第三章)

これは、自身に対して「恋」をしていると信じ込ませる自己暗示の意味合いが強かつたのかもしれない。その証拠に、この行動を「私」は「人工的な努力」と表現してい

る。

以上のことから、隠すことをしなかつた三島と、ひたすらに隠し続け、さらには自己暗示までした「私」の性格の違いも見えてくる。事実と虚構を綯い交ぜにした『仮面の告白』は、主人公の性格を変えることで、「生体解剖」を試みたのだろう。

つまり、『仮面の告白』とは、事実に「仮面」と言う名の虚構を被せて、自身の半生を「告白」しているのだ。

では、なぜ虚構と言う「仮面」を被つて「告白」をしやうと三島は考えたのだろうか。それは、三島による理想の「三島由紀夫」像の確立を目的とした、自身の過去を作り替える作業としての意味があつたのではないかと考える。その過去の作り替えとは何かを考えていく。

通常、過去を作り替えることは不可能だ。過去とは過ぎ去つた時のことを言うのであつて、現在の私たちでは介入できないものだからである。しかし、三島は『仮面の告白』を通して、自身の過去、公威として生きてきた時間を再構築しようと考えたのだ。

何故そのようなことをする必要があるのか。それは、公威としての半生では、自身の理想とする「三島由紀夫」像にふさわしく無いと考えたからではないだろうか。三島は、

自身の虚弱な肉体に対して持っていたコンプレックスを払拭する為に、身体を鍛え上げている。これ程までに理想を具現化しようと努力する三島であれば、小説を通して、理想の自分を描こうとするのも自然な流れと言えないだろうか。しかし、あまりに自身の過去とかけ離れたものでは現実味が無くなってしまふ。そうした中で生まれたのが「私」である。『仮面の告白』で描いた「私」こそ、公威が求める「三島由紀夫」の理想の過去なのだ。世間に「三島由紀夫」とはこんな人間なのだと自ら主張することで、他でもない本人発信の情報として信頼度は高まる。言い換えるならば、公威の過去とは違う、「三島由紀夫」の過去が完成したのだ。では、作者が求めた理想の過去とはどういったものだったのか。次から詳しく考察していく。

## 二、「私」の人物像

理想の過去の内容を明らかにする為に、以降から「私」について順を追って考察していく。

まず、「生まれたときの光景を見たことがある」と「私」が第一章の冒頭で語る部分である。「私」の最初の自分語りだ。ここで、覚えている筈のない記憶を持っていると言っている「私」と、そんなことはあり得ないと言って否

定する大人との関係性から、他者と「私」の思考に大きなずれが生じていることが伺える。普通の子供とは違う「私」の発言は、大人たちには奇異に写った。冒頭のこの部分から、主人公「私」の特異な人生は始まる。

次に語られたのは、「汚穢屋」や「花電車の運転手」「地下鉄の切符切り」への憧れの感情である。ここで、「汚穢屋の紺の股引」に出会った場面を次に引用する。

坂を下りて来たのは一人の若者だった。肥桶を前後に荷ひ、汚れた手拭いで鉢巻をし、血色のよい美しい頬と輝やく目を持ち、足で重みを踏みわけながら坂を下りて来た。それは汚穢屋——糞尿汲取人——であつた。彼は地下足袋を穿き、紺の股引を穿いてゐた。五歳の私は異常な注視でこの姿を見た。(第一章)

この文章で、「私」は「悲劇的なもの」としての「汚穢屋」と、股引が明瞭に輪郭づけている下半身に惹かれている。この出会いが『私が彼になりたい』という欲求、『私が彼でありたい』という欲求が私をしめつけた。』という思いを喚起させ、「私」の性的嗜好を決めた一つの要因と言えるだろう。以降、「私」は一貫して逞しい肉体を持っている男

性や、どこか「悲劇的なもの」を背負った「地下鉄道の切符売り」などの職業の男性を好んだ。この「悲劇的なもの」を、「私」は本文中で次のように分析している。

私の知らない・又そこから私が永遠に排除されてゐるやうに思へる「悲劇的な生活」を彼らから強烈に感受させられたからだつた。とりわけ、地下鉄道の切符売りの場合は、当時地下鉄駅構内を漂つてゐたゴムのやうな薄荷のやうな匂ひが、彼の青い制服の胸に並んだ金釦と相俟つて、「悲劇的なもの」の聯想を容易に促した。さういふ匂ひの中で生活してゐる人のことを、何故かしら私の心に「悲劇的」に思はせた。私の官能がそれを求めしかも私に拒まれてゐる或る場所で、私に關係なしに行はれる生活や事件、その人々、これらが私の「悲劇的なもの」の定義であり、そこから私が永遠に拒まれてゐるといふ悲哀が、いつも彼ら及び彼らの生活の上に転化され夢みられ、辛うじて私は私自身の悲哀を通して、そこに与らうとしてゐるものらしかつた。(第一章)

引用部分で分析された「悲劇的なもの」における悲哀感、

悲劇性を、西本匡克氏は以下のように分析している。

作中の主人公「私」と關係なしに行われる生活や事件とその人々、「私」がそこから拒まれているという悲劇性、永遠に拒まれている悲哀は、「私」は彼になることは出来ないけれどもそれ故に憧れずにはいられない。そこに「私」の悲劇が存在するのである。<sup>(註5)</sup>

この分析によれば、相手のようには決してなれない場合や、決して当事者になることはない事件など、永遠に近づけないことへの悲劇性がより憧れを強めるようだ。その結果として、より強い悲哀へと繋がる。つまり、近づけないという劣等感によつて憧れが生まれ、その憧れが「私」の持つ悲哀を形成し、また憧れを強くしていくのである。更に言えば、人物以外の場所においても「悲劇的なもの」に注目している場面がある。例えば死と隣り合わせの世界である「戦場」。他にも、近江と二人きりで会った「科学教室の裏手」の「広闊な競技」の雪景色を「いはば新鮮な廢墟」と表し、「悲劇的なもの」として興味を持った。それらの「悲劇的なもの」の中でも、特に「私」が好んだのが逞しい体が傷つく様である。それは、「殺される王子」の

「竜に噛まれる死」の部分の読み方にも表れている。その部分を次に引用する。

「竜はすぐに、がりがりと王子をかみくぐりました。王子は小さくかみ切られる間は、痛くてくぐたまりませんでした。が、それをじつとこらへて、すつかりきれぎれにされてしまひますと、またふいに、もとの体になつて、ひらりと口の中から飛び出しました。体にはかすれ傷一つついておりません。竜は、その場へ倒れて死んでしまひました」(第一章)

この中の「体にはかすれ傷一つついておりません」とい一行が気に入らなかつた「私」は、「またふいに、もとの体になつて、ひらりと口の中から飛び出しました。体にはかすれ傷一つついておりません。竜は、」の部分を手で隠し読むことで、次のように自分の理想の物語を完成させた。

「竜はすぐに、がりがりと王子をかみくぐりました。王子は小さくかみ切られる間は、痛くてくぐたまりませんでした。が、それをじつとこらへて、すつかりきれ

ぎれにされてしまひますと、その場へ倒れて死んでしまひました」(第一章)

このように、「悲劇的なもの」の中でも、とりわけ体が傷つく様を好んだ「私」は、後に逞しい肉体を持つ男性たちを「私の空想の兇器で殺戮」するに至る。その「空想」の内容を次に引用する。

少年がコックの頑丈な腕のなかで急にぐつたり首を垂れた。コックは事もなげに彼を抱きかかへて調理台の上へ置いた。

(中略)

私は自分の椅子にかへつて、大皿のわきから特大のナイフとフォークをとりあげた。

「どこから手をつけませう」

返事はなく、多くの顔が皿のまはりに乗り出して来る気配が感じられた。

「ここが切りたいでせう」

私は心臓にフォークを突き立てた。血の噴水が私の顔にまともにあたつた。私は右手のナイフで胸の肉をそろそろ、まづ薄く、切り出した。……(第二章)

以上のような「空想」によって、「私」は自身の「悲劇的なもの」への欲求を満たしていた。傷つけるという攻撃的な行為と共に、「私」は逞しい男性の体に対して、性的興奮を覚える。次に挙げる「聖セバスチャン」の殉教図<sup>1</sup>を見ている場面は、そんな「私」の初めての「悪習」が行われた場面である。

その絵を見た刹那、私の全存在は、或る異教的な歡喜に押し揺るがされた。私の血液は奔騰し、私の器官は憤怒の色をたたへた。この巨大な・張り裂けるばかりになった私の一部は、今までになく激しく私の行使を持つて、私の無知をなじり、憤ろしく息づいてゐた。私の手はしらずしらず、誰にも教へられぬ動きをはじめた。私の内部から暗い輝かしいものの足早に攻め昇つて来る気配が感じられた。と思ふ間に、それはめくるめく酩酊を伴つて迸つた。……

——やや時すぎて、私は自分がむかつてゐた机の周囲を、傷ましい思ひで見まはした。窓の楓は、明るい反映を、私のインキ壺や、教科書や、字引や、画集の写本版や、ノート・ブックの上にひろげてゐた。白濁した飛沫が、その教科書の捺金の題字、インキ壺の肩、

字引の一角などにあつた。それらのあるものほとんどりと物憂げに滴りかかり、あるものは死んだ魚類の目のやうに鈍く光つてゐた。……幸ひ画集は、私の咄嗟の手の制止で、汚されることから免かれた。

これが私の最初の *ejaculatio* であり、また、最初の不手際な・突発的な「悪習」だつた。(第二章)

描かれていたその美しい肉体に「ただ青春・ただ光・ただ美・ただ逸楽あるだけだつた」と感じた「私」は、殉教図としてではなく、性的欲求を掻き立てるものとして見てゐる。世間一般から見ても、思春期の少年がここで言う「悪習」を犯すことはさほど問題ではない。ここで取り上げるべきは、その「悪習」を誘発した原因が、「聖セバスチャン」の殉教図<sup>2</sup>という、傷ついた男性の絵だつたということだ。前述の「汚穢屋」の部分を、自身の性的嗜好を決める切つ掛けとするならば、この「聖セバスチャン」の殉教図<sup>3</sup>の部分は、まさに「私」の性的嗜好を決定づけた出来事と言えるだろう。以降、「悪習」を繰り返すようになる「私」は、「悪習」が原因で、過度の貧血体質にまで陥るほどにのめり込むようになる。このことから、「私」は、極

めて性的欲求が強い人間だということが窺える。

「悲劇的なもの」への欲望を「空想」という手段で満たし、性的欲求を「聖セバスチャン」の殉教図などの同性の肉体で満たす「私」は、もう一つ欲望を満たす手段を持っていた。それが同一化である。その顕著な例が、憧れた人物「天勝」を真似て女装するというものだ。詳しく言えば、幼少期の「私」が「天勝になりたい」という思いから、女装をするという「扮装欲」を満たす行為のことだ。この「扮装慾」は「汚穢屋」などに対する気持ちとは「本質的に異にするもの」としている為、性的嗜好には影響を与えなかったようだが、憧れる者に対しての同一化が「私」の中での最上級の愛情表現であることが見えてくる。「私」は、もともと自分自身の身体にコンプレックスを持っていた。そのコンプレックスを媒体として膨れ上がった憧れの感情が、同一化の感情を引き出し、最終的に性愛の対象へと変化していったのだ。

ここで一つの疑問が浮上する。物語の中でも重要な人物である園子への感情についてである。園子に出会い園子の美しさを理想の美とし、その美しさを愛するようになるものの、「私」の好意の現れである同一化を図ろうとはしなかった。勿論、「悲劇的なもの」として「空想」もしてい

ない。しかし、「私」は、園子と出会ったことで、初めて女性に心惹かれていたのは「女性にこれほど心を動かす美しさをおぼえたことがなかった。」と言っていることからわかる。以前は女性に対して興味をそえられることなかった「私」にとって、園子は特別な存在である。そして、「私」は園子を「正常さ」への糸口として特別視していた。それにも関わらず、「私」の中での最大の憧れの表現である同一化はなりを潜めていた。あくまで理想の美として愛する対象であり、性的興味は一切無いプラトニックな感情である。というのが「私」の主張ではあるが、今まで「悪習」を多く繰り返してきた「私」が、果たして性的欲求無し of 恋愛など可能なのだろうか。その上、園子に対する「私」の態度は、今まで興味を惹かれたものへの態度とは明らかに違うものだ。憧れという下から相手を見上げるような感情が、園子に対しては好ましいというような、上から見下ろすような感情になり、憧れるものに対して悲哀を持って見ていた「私」の「悲劇的なもの」に惹かれるという考えが崩れている。

「悲劇的なもの」の定義として「私」は、「私が永遠に拒まれてゐるといふ悲哀」があつて初めて「悲劇的なもの」だと言っている。つまり、自分とは無関係であることが重



要だと言うのだ。これを決定づけているのが徴兵の際に見せた「私」の行動である。死を恐れず、「私」だけは決して死ぬまいといふ確信」を持っていた「私」に、徴兵されるという状況の変化により目の前に死への道が開いた。喜び勇んで兵士として徴兵されるかと思いきや、医者 of 誤診による徴兵免除の事実喜んで死に背を向けて駆け出したのである。この死を恐れていないという考えも、自身と死という「悲劇的なもの」がかけ離れた存在だと「私」が考えていたからこそのものであったのではないだろうか。そのことがわかる部分を、次に引用する。

私は自分を「死」に見捨てられた人間だと感じることはうを好んだ。死にたい人減が死から拒まれるといふ奇妙な苦痛を、私は外科医が手術中の内臓を扱ふやうに、微妙な神経を集中して、しかも他人行儀にみつめてゐることを好んだ。(第三章)

この文章から、「私」がいかに死を遠くに考えていたかがわかる。「死」が自身とは遠い場所にあることで「私」の定義する「悲劇的なもの」となり、理想の死に方考えるなどの美化が「私」の中で起こった。つまり、近づけば

近づく程に「私」にとってそれは好ましくないものへと変化するということだ。ここで忘れてはいけないのは、「私」が憧れのものとの同一化を図る傾向があるということだ。それを裏付けるように、「私」は死を求めているような節があることが伺える部分を次に引用する。

私はその写しを自分の手にうけとつて、目を走らせる暇もなく事実を了解した。それは敗戦といふ事実ではなかった。私にとつて、ただ私にとつて、怖ろしい日々がはじまるといふ事実だった。その名を聞くだけで私を身ぶるひさせる、しかもそれが決して訪れないといふ風に私自身をだましつづけてきた、あの人間の「日常生活」が、もはや否定なしに私の上にも明日からはじまるといふ事実だった。(第三章)

「私」の「私」だけは決して死ぬまい」という自信が打ち砕かれ、戦争という死が現実味を帯びる状況から逃げ出した。しかし、死を怖れていながら、死が敗戦という事実によつて遠ざかったことを喜ぶことは無かった。寧ろ、最も簡単に死を迎える方法を失い、「日常生活」が来ることを怖れている。このことから、「私」という人物は、矛盾とこ

都合主義の塊と言えるだろう。

### 三、「仮面」と「私」

以降からは、「私」がしてきた「告白」の中に存在した「私」にとつての「仮面」と、その「仮面」に隠された部分を作中の「私」の行動を通して明らかにしていく。

まず、「仮面」とは何か。端的に言えば、演技することである。その演技には二種類ある。一つが他者に対して同年代の青年と自分が同じであると装うというもの。もう一つが自身の内面に嘘をつくことである。前者はそのままの意味である。では、後者の自身の内面に嘘をつくとはどういうことか。それは、「私」が同性愛者であると自身を偽っていたのではないかということだ。何故そのような考えを抱いたのか。それは、「私」は近江に対して次のような感想を持っていたからだ。

誰が彼から「内面」を期待しえたらう。われわれが遠い過去へ置き忘れて来たあの知られざる完全さの模型だけであつた。(第二章)

この言葉から、近江の内面に執着していないことがわか

る。内面を抜いて外見のみを抽出する行為を恋愛というのは、いささか強引ではないだろうか。これは、近江に対してだけ言えることではない。街で見かけた好みの身体の男性に対して脳内で行うある種の情報操作も、外見のみを抽出している行為である。このことを総合すれば、男性の逞しい身体に憧れるあまり、その憧れの肉体を持つ人物に対する憧れの念を恋と勘違いしたということになる。とは言え、「私」が同性愛者では無いと結論づけるには、これでは証拠が不十分である。そこで、「私」が持つ「悲劇的なもの」への憧れについて今一度注目する。そこで、「私」の考える「悲劇的なもの」の定義の一部をもう一度引用する。

私の官能がそれを求めしかも私に拒まれてゐる或る場所で、私に関係なしに行はれる生活や事件、その人々、これらが私の「悲劇的なもの」の定義であり、そこから私が永遠に拒まれてゐるといふ悲哀(第一章)

「私」の状況は、周りの友人たちや他の青年たちが持つ女性を愛するという「正常さ」から「私」は拒まれていることになる。この状況そのものが、「悲劇的なもの」とも取れる。しかし、「悲劇的なもの」の定義には「私に拒まれ

てゐる」ことも重要である。「悲劇的なもの」と同じ状況に「私」が居るのでは、「私に拒まれてゐる」という条件は満たせない。ここで、「私」の持つもう一つの好きなもののアプローチ方法があつたことを思い出してもらいたい。それが、憧れるものとの同一化である。幼少期には、この同一化によつて「天勝」との同一化を果たした。憧れるものに近づこうとし、それでありたいと願う「私」の性格を考えれば、自身で定義した「悲劇的なもの」へ近づこうとしてもおかしくは無い。同性への恋愛感情を持たない「私」が、同性愛者という「悲劇的なもの」であろうとした。こう考えた場合、同性愛者であると自身に嘘をついたことが、「仮面」の一部であると考えられないだろうか。

女性を愛せず、園子を拒み、同性愛者でも無い。これこそ、「私」の本当の姿なのだ。

ここで、物語の終焉に当たる園子との場面についても考えていく。園子との縁談が無くなった後も、「私」は頻繁に園子と出かけた。「私」は、園子と出かけたダンスホールで「二二三」の、粗野な、しかし浅黒い整った顔立ちの若者」を見かける。そのあらわになつた上半身に釘付けになると、「私」は情欲に襲われた。そして、その若者から目を離すことができなかった。その時「私」は、「園子の存在を忘れて

ゐた。」のだ。ここで、自分はどう足掻いても同性愛者なのだと感じた「私」だったが、園子の声により「私」がおそろしい感覚に襲われたのが次に引用する場面である。

園子の高い哀切な声が私の耳を貫ぬいた。私は園子のはうへふしぎさうに振向いた。

この瞬間、私のなかで何かが残酷な力で二つに引き裂かれた。雷が落ちて生木が引き裂かれるやうに。私が今まで精魂こめて積み重ねて来た建築物がいたましく崩れ落ちる音を私は聴いた。私といふ存在が何か一種のおそろしい「不在」に入れかはる刹那を見たやうな気がした。(第四章)

唯一女性の中で愛した園子よりも、男性に心惹かれてしまったことに絶望したと取ることもできる。しかし、ここで「私」が感じたのは、真実の愛であろうと信じていた「私」の恋愛感情が「仮面」であることを自覚したことによる絶望ではないだろうか。先に引用した文章でそれを表していると思われるのが、次の一文である。

私という存在が何か一種のおそろしい「不在」に入れ

かわる刹那を見たやうな気がした。(第四章)

言い換えれば、虚構の恋愛感情が存在していた「私」から、恋愛感情が「不在」となった「私」へと入れ変わったということだ。つまり、「私」はここで自身の恋愛感情の「不在」を知り、自身の本質、同性愛者ではなく他者を愛することができない人間であることに気がついたということだ。

それでは、「不在」へと入れかわる原因とも取れる「残酷な力」とは何だろうか。「私」は、男性には「肉慾」を伴った恋愛感情を持ち、逆に園子にはそれらの慾を持たないプラトニックな恋愛感情を向けていると思っていた。しかし、突き詰めて行く内に入口が違って出口は同じだと気づいた。つまり、共に恋愛感情では無かったのだ。この衝撃が、「二つに引裂」いた「残酷な力」と表現されたのだ。

では、「二つに引裂かれた」とは、何と何に「引裂かれた」のだろうか。先に引用した部分から遡って行くと、「私」が感じる絶望の前兆とも取れる場面がある。次にその部分を引用する。

苦しみはかう告げるのである。『お前は人間ではないのだ。お前は人交はりのならない身だ。お前は人間ならぬ何か奇妙に悲しい生物だ』(第四章)

この言葉は、次に引用する一般的な青年が取る行動を真似た演技をしていた「私」が、今まで出来た演技ができなくなっていたことに気づく場面の後の文章である。

以前の私なら、転瞬も忘れぬ例の演技で、他の青年と同じやうに、自分の欲望から身をそむける習慣を真似て、咄嗟にそこから目を外らしただらうと思はれる。しかし私はあの日以来、以前の私とは変わつてゐた。

(第四章)

以前まで出来ていたことが出来なくなったということを言い換えたのが、「私」という存在が何か一種のおそろしい「不在」に入れかわる刹那を見たやうな気がした。」となるのだ。以前まで出来ていた演技という悪足掻きが人間的行為だったとすると、それが出来なくなったことは「人間ならぬ何か奇妙に悲しい生物」になったと取れないだろうか。先に出た、何と何に「引裂かれた」のだろうかという問に

答えを出していく。それは、人間としての「私」と「人間ならぬ何か奇妙に悲しい生物」の「二つ」に「引裂かれた」ということだ。

次に、「私が今まで精魂こめて積み重ねて来た建築物がいたましく崩れ落ちる音を私は聴いた。」という部分に注目する。以前の「私」は、同性愛者であることで「悲劇的なもの」と同一化を果たした優越感と、「正常さ」から拒まれることで感じた劣等感という二律背反する感情を混在させていた。この二律背反した感情こそ、「私」の「仮面」の下と言う名の本質だ。「私」が作中で感情の浮き沈みが激しいのは、「正常さ」を求めることで「正常さ」から遠のく悲劇と、遠のくことによって「正常さ」を持つ一般的な人々とは違う特別な存在であるという優越感を交互に宿すからだ。波打つような激しい浮き沈みが起こると言うことは、良く言えば感受性が豊かであると言える。反対に、悪く言えば流されやすいという特性の持ち主だとも言える。ここで特筆すべき点は、この矛盾した激しい感情の浮き沈みが絶妙なバランスで「私」の中で存在していた点だ。絶妙なバランスで二つの感情が混在していることで、「私」という存在は保たれていた。しかし、両極端な感情の出所が、偽りの恋愛感情からだった気づいたことにより、どちらが

本当の恋愛感情かという問題以前に、どちらも偽物の恋愛感情だったと気づかされてしまったのだ。「私」が今まで抱えて来た感情が、偽りであったという裏切り行為によって存在が「崩れた」のだ。

「人間ならぬ何か奇妙に悲しい生物」だと気づきつつも、何とか保っていた精神的バランスが、とうとう園子の声で最後の砦が突破され、演技により積み重ねてきた「私」が「崩れた」という流れが出来上がった。この流れの終着点が、園子とダンスホールで別れた時刻であり、人間「私」が崩れた「——時刻だった。」のだ。

#### 四・三島と『仮面の告白』

『仮面の告白』とは、作者三島由紀夫による限りなく私小説に近い形で過去のつくり変えが行われた小説であると結論づけた。何故なら、自身が考える作家三島由紀夫像の確立の為の道具であったと考えた為である。三島にとって、『仮面の告白』という作品自体が「仮面」であり「告白」の内容であるのは明白だ。しかし、この作品は三島の作家としての側面が一切描かれていない為、私小説とは言えない。では、三島にとっての「告白」とは何だったのだろうか。以降からは、三島が『仮面の告白』を執筆した理由を

考察する。

まず、何故主人公に「私」と語らせたのかについて考える。ここで、田中美代子氏による『仮面の告白』と私小説の関係について次に引用する。

この小説は、その「私」の認識の曖昧さを衝き、これを逆手にとって「私」をまるごと客体化し、仮構化してゆく過程を「告白」として提出した、つまりこれは私小説に対する、私小説の方法論的批評なのである。<sup>(注6)</sup>

実生活に基づいて単調に事実を綴るという私小説の形を模倣しながら、それとは全く別の方法をとって綴っているのが『仮面の告白』である。更に、田坂昴氏は私小説に対して『仮面の告白』がどういった立場で主張して書かれているかを次のように考察している。

作中の主人公に「私」という一人称を使い、その「私」の告白体の小説として仕立てあげ、その上で題名にわざわざ「仮面の告白」と銘打っている。私小説的文学風土の色あい濃厚なわが文学気流（近代が近代的自我の探求を主軸とする季節であったとするなら、わが私

小説も作中の主人公の私にびったり合わさるかたちでの特殊に変形された自我探求の近代小説である）にたいていする皮肉な挑戦・平手打ちだったとれば、それはそうとも受けとれよう。「私」を主人公とする作品ではあるけれど、ここに描かれている「私」は私小説風の「私」ではないのだから読みまちがえないように、と親切にも、そして皮肉をこめて警告しているのだ、と告白であっても仮構的小説としてのフィクションな告白という主張である。<sup>(注7)</sup>

田中氏も田坂氏も、「私」という一人称は私小説的「私」では無く、曖昧かつフィクション的な意味での「私」だと考えているのだ。この考えとは反対に、本多秋五氏は次のように語っている。

まぎれもない真実の響きがあり、まさしく本心が語られていると感じられる。その意味で『仮面の告白』には、ここまであからさまに真実を書いてよいものか、と思うほど赤裸々に真実が語られている。<sup>(注8)</sup>

『仮面の告白』に書かれていることは真実であるという意

見の本多秋五氏と同じような立場で、松本徹氏は次のように語っている。

彼の生ひ立ちを知る最も重要な資料と見なし得るほどののである。<sup>(注9)</sup>

勿論、本多氏や松本氏の主張するところも一理あるだろう。しかし、どれ程平岡公威の半生に酷似した部分が多くあろうとも、作家としての側面を一切排除した状態の小説を真実と考えることは困難である。フィクショナルでありながら、何故主人公に「私」という一人称だけを与えたのか。名前も無しに「私」と書かれれば、読者はその一人称を作者だと勘違いするだろう。『仮面の告白』程作者本人の半生と酷似した展開であれば尚更である。これを意図的に三島は行つたのだ。私の作者三島由紀夫による限りなく私小説に近い形で過去のつくり変えという考えは、ここに起因する。意図的に作者本人の半生であるかのように描くことで、平岡公威の半生とは違う、三島由紀夫の半生の完成を目論んだのだ。自身が考える作家三島由紀夫像を確立する為に『仮面の告白』を執筆し、「正常さ」から拒絶される特別な存在として「私」を描いた。それこそ、平岡公

威が求めた作家三島由紀夫の半生なのである。「正常さ」に拒まれる非凡な人間であり、恋愛感情さえ持てない「悲劇的なもの」という他の人間とは違う特別な存在が、作家三島由紀夫で無くてはならなかったのだ。

注

(注1) 菅原洋『三島由紀夫『仮面の告白』』国文学解釈と鑑賞 至文堂 二〇〇八年二月

(注2) 先掲『三島由紀夫『仮面の告白』』至文堂

(注3) 柴田勝二『三島由紀夫——魅せられる精神』おうふう社 二〇〇一年一月

(注4) 先掲『三島由紀夫——魅せられる精神』おうふう社

(注5) 西本匡克『三島由紀夫 ダンディズムの文芸世界』双文社 出版 一九九九年六月

(注6) 田中美代子『鑑賞日本現代文学 第二十三卷 三島由紀夫』角川書店 一九八〇年十一月

(注7) 田坂昴『三島由紀夫論』風濤社 昭和四十五年八月

(注8) 本多秋五『物語戦後文学史』中巻 岩波書店 一九九二年四月

(注9) 松本徹『三島由紀夫論』朝日出版 一九七三年十二月

なお、本文の引用は『決定版 三島由紀夫全集』第一巻 新潮社 二〇〇〇年十一月に拠った。